

ようこそ 恐竜ランドへ

神奈川県足柄下郡箱根町 野中 草子

「恐竜を見てごらんよ、何かがわかるから。大理石を見てごらんよ、なにかが見えるから。」私はそう言って絵本を閉じた。「読んで、読んで」と次々に子供たちが絵本を持って集まってくる。保育園の二歳クラスの一月は、四月から始まる新しいクラスへのステップアップが近いことを教えてくれる。少しずつ文字を自分でも読み始めている。家庭か、あるいはレッスンに行っているのか、アルファベットが読める子もいる。ときどきいくつか間違えて読んでいることも、なんだかとても新鮮でうれしさを感じる。都内の保育園でお手伝いすることになったのは、友人が家の事情で一年間休職せざるをえなくなったためで、一年間代理の育児補佐のピンチヒッターだった。まさに、猫の手の猫。しかも、はじめての経験。

子供のいない私にとって、友人や親せきの子供たちに触れる以外には機会がない。ましてや子育てなど想像もつかない。が、六十を過ぎた一生のうちで、こんな機会もめったにない、良いチャンスかもしれないと不安を乗り越えて、引っ張り出されてみた。友人いわく、「あなたは子供が好きだから、いいとおもうわよ」。彼女らしい勝手な解釈だったが、あたらずとも遠からず。はじめのうちの緊張がほじめてゆくと、子供たちの渦にすっかり飲み込

まれて溺れかけている。正直なところ、かわいくてしかたがないのだ。

休みの日に、自宅でのんびりしていても、ふと、あの子は元気に楽しく家で過ごしているだろうか、と気にかかるし、ちょっと家庭の事情のある子のお腹がすいてはいないだろうか、とふと思いつく。

言ったらきりがなくらい、どの子もどの子も、それぞれの個性に満ちている。と同時に、それぞれの家庭環境や身体的な事情を小さいながらも抱えている。そして、当然のことながら、生命力に満ちていて、未来が全身に詰まっている。自分にもこの年代があったことなど、今の私には信じがたい。フグは生まれて最初には毒がないのに、生きていくうちに食べ物から少しずつ毒が体に溜まって行き、しまいいは人間を即死させるほどの毒を体に貯めこんでいるらしい。私がフグだったら、と考えると少しそらおそろしいような気がする。だいぶ生きてきたので、それ相応に毒も溜まっているのだろう。けれど、この子供たちには、毒の気配もなく、もし仮にあったにしても、極めて微量。酒好きがたしなむ微量のしびれフグヒレ酒にも及ばないだろう。

けれども、彼らには、毒の代わりに、涙という秘密兵器がある。これにあたるとしびれる。実に効果的だ。どうしてこんなにぽろぽろと流れ出てしまうのか、と思うほどにせつなくなる。ただし、これがなかなかのしたかな涙であることも多く、どう受け止められているのかを察知する黒い瞳が光っているし、むせびあげる泣き声に至っては、実に効果を心得ている。そのとき、その子は、

なにを求めて泣いているのか、そこにしびれる清らかな毒を潜ませることもできる。が、職員の先生達は当を得ているので、簡単にはしびれない。しびれておたおたするのは、慣れぬわたしくらいのものである。先生方はケースバイケースで、そのまま見守っていたほうが良い場合も心得ている。すると、泣いている子供のほうは、その子の個性と子供ながらの判断力にもよるのだが、泣き止む子もいれば、なぜ泣いていたのかがわからなくなつてそれがわからないから泣き続ける子もいる。後者の個性の子で、しかも、チャーミングな女の子だったりすると、さてさて、年頃になったら男性諸君をこまらせるのだらうね、と万華鏡を覗くような風景に見えてくる。

晴れた日で風が強くなければ園庭で遊び、寒い日や雨の日にはホールで駆け回る。これが子供たちは大好きで、先生方も元氣いっぱいに動き回る子供たちに目を細めて、時には一緒に走り、「今日はランチを食べた後のお昼寝タイムは、ぐずらずにきつとぐつすりねてくれそうね」とさらに目が細まる。

そんなある日の午前中。ホールで遊んでいるI君が、突然、恐竜に変身した。足を曲げて腰を落とし、背中にはまるで恐竜の背中の凸凹が目に浮かぶくらいにカーブして、頭は斜め下方を向き、両手は肘から曲げて、手のひらは恐竜の爪のように開いている。そのかっこうで、のっしのっしと進む。他の子供たちは、キヤーキヤー叫びながら怖そうに、楽しそうに逃げ回っている。このI君恐竜は、泣き声はないらしい。歩きながら頭を少し左右に振る。まあ、なんて、まるで恐竜が乗り移ったみたいだ。最初は静観し

ていた職員の先生が、「I君、恐竜になっちゃったのね」と話しかけて、少し事態を收拾へ向かわせたい様子。それが恐竜は氣に入らなかったのだらう。先生の手を、ガブリ、とやった。

恐竜にかみつかれた先生は平静を装うものの、青い顔。他の先生が救済に入り、I君をどこかへ連れて行つた。かまれた先生は、「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と少し強がりを見せて、手についた菌形を見ている。

止まったタイムウオッチがまた動き出したみたいに、しばらくして、みんなはまた元氣に走り回り、I君も戻つて来た。衛生室で口内をすすいでもらつてきたらしい。

かみつき癖が恐竜にあったとは今日知つたが、あの恐竜姿は見事だった、とわたしは感心してすっかり氣に入つてしまった。まるで本当の恐竜が乗り移つたみたいだった。もしかすると、I君のDNAの中には、色濃く残つて生まれてきたのでは、などとあらぬことも思えてくる。いや、生命が子宮内で発生してから、成長する間に進化の姿をたどつていくというから、もしかすると、生命進化の途中で、人間にも絶滅したはずの恐竜の氣配がよぎる時期があつたりするのかもしれない。鳥は恐竜の生き残りともいわれているじゃあないの？

その日は、家に戻る途中で書店に立ち寄り、『わけあつて絶滅しました』や、『絶滅動物物語』や『さんねんないきもの事典』を買い込んだ。家に帰ってから読みふけり、さらにはサイトでも検索の森に入り込んだ。

次の日。充実感と共にふたたび保育園へ。お教室はなにことも

なく、平和にランチタイムを迎えた。小さな椅子に腰かけたI君。私と目が合って、思わずにこり。それをきっかけに、私はいわでもいいことを言ってしまった。

「恐竜君、すごかったよ。まるでほんとうに恐竜みたいだった。恐竜のこときつとよく知っているのね。」すると、I君恐竜は一気に話し出してとまらない。先週のお休みの日に、おじいちゃんたちの住んでいる千葉の市原市に行ったこと。そして、「キッズダムの大恐竜ランドに行ったんだ、すごいよ、ほんとうに恐竜が生きていて、たくさんいるんだ。ほくはトリケラトプスが大好き。」もう目がきらきらと輝いて、うれしさが溢れている。なるほど、と、昨晚読み漁った本や資料を凌駕するリアリティだった。

私は急にI君が立派な恐竜に見えてきた。氷河期も、絶滅も乗り越えて、こうして脈々と育んでいるみたいに。それでおもしろ、ランチのお皿を恐竜に食べさせてあげるみたいな気がしてしまつて、I君のテーブルに置くときに、「はい、たくさん食べてね、恐竜君」と言ってしまった。職員の先生から、非難めいた視線を浴びてしまった。ランチが終わった後で、先生からこっそり呼ばれて、「恐竜君、はやめてください」とのこと。「はい、ごめんなさい、気を付けます」とあやまり、ちよつとまた失敗。

ところが、I君は恐竜癖がついてしまったのか、はたまた、ほんとうに恐竜の血が騒いしまうのか、時々恐竜化している。その度に、職員の先生は、まただれかをかみつかないか、心配で目を離さずにいる。当の本人のI君は、またおじいちゃんの家に行つ

たら大恐竜ランドに行く、と楽しみにしているようだ。お里帰りのお母さんと同じように、I君恐竜も大恐竜ランドの故郷へ行けるのを楽しみにしているのらしい。

こうして一月ももうすぐ終わると、たちまち、短い二月。そして三月になる。二歳のクラスは、お隣の部屋の三歳クラスの部屋へ移り、順番に各クラスはステップアップするだろう。そして、五歳クラスは、いよいよ卒園。みんなランドセルの小学生になつて、保育園を後にする。

この私も、いよいよ三月には卒園。一年はあつという間だった。たくさんの子供たちと、泣いたり笑ったり、けんかしたり、仲直りしたり。ランチやおやつも食べて、お迎えの保護者の到着が遅くてさみしい顔になつてしまう子供をなだめたり、抱っこしたり、おんぶしたり。友達に引つ張り出されたことを心から感謝している。一生のうちでもなんとかけがえない時間であつたことか。

自分をふと振り返つてみても、二歳のことを覚えていえるといえる自信がまったくない。保育園には通わなかったが、幼稚園時代を思い出してみても、どれだけのことを覚えていられるのか。ましてや、幼稚園の先生や、そのころに会つたはずの大人たちのことなどほとんどおぼえていないような気がする。

新陳代謝が早いからね、と友達はいっていたが、子供たちの記憶の中で、私と遊んだ時間は脳のすみっこどこかに行つてしまつて、忘れてしまうのだろう。

それくらい楽しいことや、いろいろな体験がこの子供たちの未来にはたくさん待ち構えているのだから。

それが平和の中で、可能な限り、幸せな日々であってほしい、
とここから祈る。

恐竜は絶滅しても、彼らの記憶の中で残って行くのだろうか。

ジュラ紀由来の大理石は、かつてのどんな恐竜時代の風景を記憶に秘めているのだろうか。